FOREVER LOVE

羽流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＯＲＥＶＥＲ　ＬＯＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ２５８３Ｄ

【作者名】
羽流

【あらすじ】
誰よりも近くに居た存在。一言で別れてから2年が経った。その元彼女が目の前にいます。シカトしてしまいました（汗そりゃ大変です

1話：シカトが再会！？（前書き）

やっちゃった感のある第1作目です。。
まぁ生暖かい目で見守ってくれれば幸いです～

1話：シカトが再会！？

5月23日日曜日
高校生になりしばらく経ち今の環境には慣れた。
明日から学校だが俺は今日の夜飯の材料を買いに行く。
周りはスーツを着た通勤帰りの中年やカップル、友達同士でごった返している。
そんな中俺（相川（あいかわ）　羽流葵（はるき））は一人で歩いている
午後4時と言う中途半端な時間に友達と約束、ましては女と約束なんてしているわけじゃない。
寂しいやつとか言うな！
俺は一人暮らしだから買い物に行こうとしているだけ
歩いているとここら辺で良く使われる待ち合わせスポットで俺はみた。

それは人違いかもしれない。
似てるだけかもしれない。
（寒さで幻覚見えてんのか？）
それは綾瀬（あやせ）　美咲（みさき）。つまり元カノ。に良く似た人
2年前まで俺の一番近くにいたといっても過言ではない存在。
美咲と俺は中学が一緒で中一の夏休みが終わった辺りで付き合い始めた
家族が居ない俺にとっては彼女と言うのが一番近い存在だった。
それから特に大きな問題も無く過ごしていた。が。
美咲が親の都合で海外に行くということになり
「いつ帰ってこれるか分かんないし羽流葵に迷惑かけたくないから別れる」
と言い残してそれ以上俺に何も言わせないで行った。
いや。これは人違だ。

俺はスーパーに向かう

翌日月曜日
１－Ｃと書かれたプレートがついているドアをくぐる。
一番窓際は女子の席でその隣のが男子。それが
４列ある。
俺の席は窓際の列の一番後ろ。
席位置的にはいいんだが隣が悪魔に近い
深川（ふかがわ）　棗（なつめ）
顔的には別に悪くないんだが中身は最悪。
強情、気が強い、暴力、鬼。
前も被害にあったばっかりだ。プリントを
ノートに貼る為ノリを使っていたのに
深川が最初は「ノリ貸して」だったのに
俺が断り続けていると遂には俺の首を掴んで
無理やり取りやがった。
他にもこいつの隣の席に居れば数々の
困難を乗り越えなきゃいけない。

「座れーＨＲ始めんぞ」
いつも俺はＨＲ５分前くらいに学校に着くから
直ぐ始まる。
「ねぇねぇ！羽流葵さぁ、転校生来るの知ってる！？」
深川が話しかけてくる
「うるせ。そんなん知るか」
会話終了。
出席確認等が終り、教師が連絡事項を伝える時に
その話があった
「転校生の紹介をする」
そう言って一旦担任は廊下に出てそいつを連れてくる

「それじゃ自己紹介お願いな」
「はい。綾瀬美咲です。2年前までここら辺に
住んでてまた戻ってきました。これからよろしくお願いします」
頭を下げた
教師は深川の後ろにある1つの空き席を見ていった
「深川の後ろにと言いたいところだが転校して来て
心細いだろうから～深川、お前が後ろに移って
綾瀬が深川の席にー・・・」
そんなことになったら深川とは別の怖さが
ある。それに俺は耐え切れる自信なんてない。
俺は深川に言う
「絶対交換すんな！」
こうゆう時こいつの強情な性格が役に立つ
「あったりまえよ」
そう返ってきて深川は立って教師に言う
「変わりたくない場合はどうしましょうかー？」
もちろん担任は予想外だったのか困った顔をした
そこで深川の前の席の中川さんが
「私が変わります」
の発言で収まった。
席は極めて近いが隣よりましだ。

俺の前の席の北岡（きたおか）　颯真（そうま）が
後ろを向いてきて
「おいおい！綾瀬ってかわいくね？オレ席隣だよー
いいだろーハルは可哀想だなぁ～あんな強情女が隣で」
「自己推薦や」
「は？」
それから俺は美咲と話すことなく時々
後姿を見るだけで放課後になった。

俺はバスケ部に所属しているがあんま部活にでていない。
今日も出るつもりはない。
やべぇ。ねみぃ。寝てくか
そう思いつき腕をの上に伏せて目を閉じた

1話：シカトが再会!?（後書き）

何か遠まわしに言いすぎて分からない表現があると思いますがそこは想像にお任せします（おぃ

次も読んで頂けるのか不安でたまりません。

2話：これが本当の再会？（前書き）

今回短めです。

2話：これが本当の再会？

・・・・・・・

椅子を引く音がした。
目を開けると夕日の光が当たる
体を起こすとななめ右前に今日の有名人が
居た。
「・・・・・美咲」
話すのもなんか嫌だったが寝起きで魔が差したのか
その名前を呼んだ
「・・・・・」
だが反応がこない
「シカトかよ」
「2年ぶりの元カノが同じクラスに居るのに何で何もしてくんないの！？」
キレた
俺と美咲に間に2年分の溝が出来てたらしい。
「悪かった」
「両親も戻ってきてるんか？」
聞きたいことを消化しておくとしよう
「いきなり質問・・・・？ま、いっか。
親が長引きそうだからあたしの誕生日もあったし
日本に戻って元の家で一人暮らししていいって事
になったの」
「へぇ。でも学校の手続きとかはどうしたん？」
「最低限の書類とか書いてくれて来週に少しだけ
日本に戻ってくるからその時に本格的な
手続きしてくれるって～」
「ふぅん～」

「羽流葵さ・・・・」
「あぁ？」
「やっぱいいや」
「はぁ？言えよ」
「てか羽流葵って部活やってないの？」
「話逸らすなよ。バスケ部入っとるが活動には出とらん」
「そうなんだ・・・・ねぇ、一緒に帰らない？」
「別に構わんが」
そんな成り行きで一緒に帰ることになった。

2年前までは普通に手つないで帰れてたのに
今では微妙な距離
特に会話もない。でも居心地は悪くなかった。
俺の家の前につく。
「今度一人暮らしの知恵教えてね～」
手を振りながら美咲は歩き出した
俺はそん時何がしたかったのか分かんなかったけど
「送ってく」
と言ってしまった
「・・・・ありがと」
美咲の家まで送って行くことになって
また2人で歩く
「こうして女子送ってくって事は彼女いないんだ？」
「悪ぃか」
「でも羽流葵モテるでしょ？なのに
彼女居ないなんて意外だな～と思って」
「俺は決めた女としか付き合わんだけや」
「そーなんだ♪」
タイミング良く美咲の家についた。

「わざわざ送ってくれてありがと」
「別に」
俺は背を向けて帰ろうとすると
「明日から学校でも普通にしてね？」
と美咲が言った
「あぁ」
それから美咲とは普通に話すようになり、美咲は
友達も沢山できて部活にも入ったから俺と帰るのは
あれきりだった。

2話：これが本当の再会？（後書き）

勢いで2話目投稿しちゃいました。。
グダグダですみません、・ω・、
まだ見捨てないで下さいっ！

登場人物紹介（前書き）

登場人物の詳細は読んで置いた方が良いと思います。
お時間に余裕がありましたらざっと見ていただければ嬉しいです～
まだ登場してない方々も居ますが今後でる予定です。

登場人物紹介

相川(あいかわ)　羽流葵(はるき)
1年C組
美咲の元カレ。
両親は早いうちに他界しており一人暮らし。
背が高くてかっこよくて冷たそうに見えて
接してみると優しい性格上相当モテる。
東京生まれなのに何故か人と話す時は関西弁交じり。
標準語と使い分けることがある
愛称は「ハル」等

燈花(とうか)　吏緒(りお)
3年A組
容姿は格好良く、優しい。
バスケ部の主将。
下級生にとってはお兄さんタイプで
そりゃ同級生からもモテるが
玲那に告白。
ハルと仲が良い。

綾瀬(あやせ)　美咲(みさき)
1年C組
親の仕事の事情で転校したが
元の家で一人暮らしを認められ戻ってきた。
ハルの元カノ。
普通に可愛くてモテる方である。

深川(ふかがわ)　棗(なつめ)

1年C組
ハルの隣の席で気が強く強情。
一度決めたことは譲らない。
ハルには何かと文句をいうが
美咲が転校してきてから自分の
気持ちに気づく。

秋月(あきつき)　玲那(れいな)
2年A組
家が近い関係上ハルと仲が良く時々
一人暮らしのハルの面倒をみている。
陸上部で活躍していてとにかく元気で
だれとでも接しやすいタイプ。
ハルが好きだったのだが吏緒と一緒
に居る機会が増え、吏緒に告白される。

北岡(きたおか)　颯真(そうま)
1年C組
転校してきた美咲の隣の席になる。
外見は悪くはないがふざけた性格のせい
かあんまモテない。
ハルと友達だが美咲を好きになって
しまいハルを恋敵だと思い始める。

矢吹(やぶき)　飛鳥(あすか)
1年C組
ハルと同じクラス。
そしてハルが好きなのだがいつも恥ずかしい
場面ばかり見れてしまって嫌われていると
思い込んでいる。

桜井（さくらい）　良（りょう）
風の父親。
妻が早い頃に無くなってしまい
今は風も一人で育てている。
相当若いが経済力はある

桜井（さくらい）　風（ふう）
中学2年5組
ハルと吏緒を良く知っているらしい
昔から金に恵まれて育っているが
お父さん思い。

登場人物紹介（後書き）

自分で思いますね。
「話もキャラ設定もベタすぎる」と。
でも一応今後とも宜しくお願いします。
３話を今書いてます～

3話：俺、低血圧なんで。（前書き）

新しい方々が出てきます～
サブタイトルは色々迷ってて
ハルの言葉から取りました（テヘ

3話：俺、低血圧なんで。

5月30日
学校も終り、今日も部活は出ないで俺は帰ろうとすると
美咲が俺の方に体を向けもう誰もが持ってるだろう
文明器具を目の前に突き出してきた
「なんの嫌がらせや」
俺はそう言いながら顔をそらした。
「あっちに居る間は使わないだろうって解約されてたん
だけどね、親がこっち戻ってきた時に新しいの買ってくれたの！」
突き出してきたものは携帯だった。
「そんで？アドと番号なら変わっとらんから
勝手に登録でもなんでもせい」
「変わってなくても覚えてるわけないじゃん！」
「元カレの連絡先くらいメモっとけよ」
シーン。
ざわついていた教室が一気に静かになった。
まずくなぁい？
クラスの男子が1人来て俺と美咲を交互に見てから
「2人って付き合ってたのか！？」
と聞き始める
俺は焦っても事態をややこしくするだけと判断
「んなん知るか。それじゃ帰るわ」
と言い切って教室を出た。
そういえばさっきあの沈黙の時隣を見たら深川と
北岡から殺気だったものを感じたがなんだったんだ？
まぁいいか。
靴を履き替えているとバスケ部の先輩が通りかかった

「ぁ、ハル！！お前ますます部活で無くなったじゃねーか」
「俺最近低血圧なんで」
苦笑いしながら姿勢を低くして体調が悪そうにしてみる
「ったく、いつも元気だろーが。明後日の一年生大会には出るのか？」
「ん～気分次第で」
「おいおい。吏緒も寂しがってるぞ～」
「吏緒が？それじゃ出ようかな・・・」
燈花吏緒。
俺より2年上でバスケ部、中学のころから仲が良かった。
俺が最も尊敬する人だ。
まず、容姿は背は高いし顔立ちもキリッとしててカッコいいし、勉強も出来るし運動も出来る。
俺は「容姿端麗頭脳明晰完璧人間」
なんていないと思っていたがそれを覆したのが吏緒だった。
だから昔から誰よりも尊敬している。
「お前、運動神経はいいし、身長もあるし、技術もある。そんだけ才能あるんだから部活出ろよ」
「分かりました。それじゃ明日から試合終わるまで部活でます。じゃ、さようなら」
俺は話してる間に靴を履き終わり昇降口を出た。
後ろから
「・・・・当日含めて2日だけじゃねーか！！」
と叫ぶ声が聞こえた。
俺は生まれながらの運動神経のお陰で
結構バスケもうまかった。
でも、別にバスケに何を賭けてるってわけじゃないし
大好きって程でもない。
なのに何でバスケ部に入っているのかは
吏緒への憧れだったのかもしれない。

帰路を一歩一歩確実に歩く。
「は～るっ！」
ガシッ
人間の腕が俺の首に無造作に組まれる
横を見ると
玲那がニカッと笑いながらいる。
こんなんいつもの事だから気にしない
その横で能天気に笑ってるのは
秋月（あきつき）　玲那（れいな）
一応1年上の先輩である
「何や。部活はサボりか？」
「サボる訳ないじゃん。顧問が休みで陸上部も休みぃ～」
この通りとにかく元気で運動神経が良く、陸上の大会で
数々の成績を残している。
外見は可愛いと美人を足したような感じで
スタイルは良くて顔だちも整っていて面倒見も良く、
学級委員もやっていて人望も厚くしっかりしていてやっぱり
先輩だと感じるが子供のような笑い方が少し幼さを見せる。
玲那と俺が仲がいいのは家がお互い真正面にあること。
言ってみれば幼馴染という関係なのかな？
玲那も高校に入り一人暮らしを始め、時々俺の家に来て
飯作ったり世話をやいてくれる。
あの元気な性格のせいか、俺を見つけると大抵俺の首に腕を組むか
ジャンプして来たりする。
最初はそうゆう行動には抵抗があったがもう今は完全に慣れてしまい
仕方ないと思ってる。

中学の時も俺と玲那と吏緒は仲が良く、学年は皆違ったけど
よく遊んだ。

まぁ遊びと言っても皆運動は出来る方だったから
サッカーやバスケ、野球と言ったスポーツをやっていたのが
殆どだったのを良く覚えている。
玲那は中学から陸上をしていて、美咲が転校して
しばらく俺が部活に出てる時期に帰る時間が重なって
いたので会うたびにさっき述べたようなことをされ
一緒に帰っていて一時期は「俺と玲那は付き合ってる」
なんて噂が流れたときもあったが断じて違う。
玲那は毎日熱心に部活に出ているので
俺と帰るって事は最近滅多にない。
「久しぶりに一緒に帰ろうねっ。ハルくん」
ちなみに余談ではあると思うが俺のことを
ハル君と呼ぶ。
ハルとか羽流葵とかは良く呼ばれるが結構長い
付き合いなのにくん付けで呼ぶ。
まぁ、別に構わないけど。

3話：俺、低血圧なんで。（後書き）

微妙なトコで切ってしまいました；
まぁ今後に期待！ということでー・・・・
そろそろ本気で見放されるかも。。

4話：まだ大丈夫。

玲那と俺の間は美咲と帰った時のような距離は無く、結構近い。
「ハルくんと2人で帰るのってホント久しぶりだよねー」
玲那が軽い声で言う
「そうやな～」
「手、つなぐ？」
「は？」
「嘘だよー」
ニッと歯を見せて笑いながら俺の前に立つ
夕日にの逆光で玲那の顔はハッキリとは見えないけど
綺麗だった。
いつもこんな感じで落ちが早すぎるからかいを受けて
俺は玲那といるとあの笑顔につられているのか分かんないけど
自然に笑っている。
「やっぱハルくんといると落ち着く」
ゆっくりと並びながら歩く。
「何でや？」
「ん～よく分かんないけど楽しいんだよね。
他の誰といるよりも」
「そんなもんか？」
「そんなもんだよっ」
俺も同じかもしれない。
その後も普通に他愛も無い話をして
お互いの家の前につく。
「それじゃぁな」
「バイバイ～・・・・」
俺は自分の家に向き直りドアの前の3段だけの
階段をのぼろうとすると制服の袖が軽く掴まれた。

「ん？」
顔だけを後ろに向けると玲那が少し俯きながら
「もうちょっとだけハルくんと話たいんだけど・・・・いい？」
ほんの時々見る玲那の真剣っていうか
寂しそうっていうか、なにか考えてるみたいな、そんな表情。
玲那がこんな行動を俺にとるのは初めてだったから
何がなんだか分からなかったが断る理由もないし
気になる。
「俺でいいんなら話し相手になったる」
「ありがと。引き止めちゃってごめんね」
軽く笑いを顔に作りそう言う
「ウチの家でいい？」
「あぁ。全然構わん」
家のドアが開かれる。
まぁ俺も前は時々玲那の家に遊び行った時も
あったしそんな珍しいことじゃない。
「えっと、そこに座っててね～」
「おぅ」
ほんの1、2分前の真剣な玲那とは変わって
いくらかいつもの彼女に戻り始めていた。
てか、何で俺と話したいなんて言ったんだろ？
今じゃ分かるはずも無い事をダラダラと考えていると
玲那がオレンジジュースを出してくれる
そして俺からちょっと離れて隣に座る。
丁度喉が渇いてたんだ！
「ありがとーそんで話ってなんなん？」
そう言いながら飲む
「えっとね～・・・・その、ね」
とちょっと言いにくそうに所々区切りながら言う
「美咲ちゃん帰ってきたよね？」

「あぁ。美咲か」
「そんでやり直す気とかあるの？」
「何で？」
「その、だってあんな別れ方だったし・・・」
「俺的には、そんな気は更々無いつもりやな」
「そうなんだ～ハルくんと美咲ちゃんまた付き合うのかと思ってたから・・・」
「仮に俺がアイツのことに未練があったとしても俺はただの元カレだろ」
「でも・・・絶対まだハルくんと美咲ちゃんは繋がってるよ」
「え？」
「あーもう6時だぁ。早いねぇ～」
「ぁ、あぁ。ゆっくり歩いてたからな」
「こんな話だったけどありがとね～」
「いや。別に。久々に玲那と良く話したし」
そう言ってお互い手を振って自分の家に入った。

4話：まだ大丈夫。（後書き）

ホントに自分でも書いてる内容がわかんなくなったりしてます。。
そのうち編集してるかもです。

5話：バスケ復活！？（前書き）

ハルが玲那の言葉でどう動くか期待です～

5話：バスケ復活！？

俺はベットに寝ながら考える
（でも・・・絶対まだハルくんと美咲ちゃんは繋がってるよ）
玲那の言葉を思い出す。
繋がってるか
どうだろうな・・・

「ぁ～ねみぃ」
登校して早々に顔を机に伏せた
そういや今日と明日部活出るんだっけ。
机の横にいつまでもかかってる
バッシュ（バスケットシューズ）とサポーター
が入ってる袋を見る。
放課後になり教室に誰も居なくなった頃に
部活に行こうと席を立つとドアに軽く寄りかかる人影があった。
「吏緒～」
「ハルが部活でるって聞いてな。逃げ出さないように迎えに来た」
とニコっとクールな笑顔を見せた
「行こうぜ」
そう言われ一緒に歩く
「ハルが部活に来るのって2ヶ月くらいぶりか？」
「えっと～・・・いや確か遠藤先輩に無理やり
連れてかれて2週間前10分だけ出た」
「あぁ、あったなぁ～でも結局は俺がきた時には逃げてたけどな」
「だって眠かったんや。しゃーない」
「常に眠そうだがな」
等と話しながら体育館に向かう。

美咲視点
「ね！！あそこ。相川くんと燈花先輩だよ！」
あたしは同じ部活の友達５人と歩いていた。
そこには背が高く有名な俳優なんかより
様になっている。
そんなイケメンが２人そろって歩いているというのだから周りの女
子がざわついてるのも無理ない。
左にいるのはあたしが良く知った顔の羽流葵。
そして右に居るのは羽流葵より更に１０ｃｍ程背の高くて、よく友
達の恋話に出てくる燈花先輩だ。
「２人が並んでるところはじめて見たぁ！写メ撮っておこっと」
「私もはじめて見た～噂通り凄い迫力だねー」
と携帯を取り出したりガン見したりしている。
燈花先輩とは２年前からも羽流葵と仲良かったから結構話した事も
ある。
ちょっと近寄りがたい存在だと思ってたけど
話してみると普通に優しくて楽しい人だった。
「って。体育館に向かってるんじゃない？あの二人」
「え！？ってことは相川くん部活でるのぉ！？」
「そう言えば明日男バスの試合じゃなかったっけ？」
「練習見に行こうよ！」
さっきからあたしは一言も喋ってない。
「ねぇ。美咲も行こ～」
「あ、うん」
あの２人について行くようにあたし達は体育館に向かう。
体育館に近づくにつれバレー部であろう掛け声とボールが床につく
音が聞こえてくる
「ぁ。そういえば今日、部活でなくていいのかなぁ？」
「大丈夫でしょー」
体育館内には入れずドアで固まって見ている

羽流葵と燈花先輩は奥のステージの方で
靴を履き替えたりしている
あたしの周りでは
「燈花先輩カッコいい～！」
とか
「相川くんもバスケうまいんでしょ？見たい～」
そんな友達との会話には参加せずに
唯、羽流葵を見ていた。
燈花先輩と2人でボールをパスしあっている。
なにやら話しながら時々歯を見せて笑っていた。
「うわっ！相川くんと燈花先輩かっこよっ！！！」
「・・・あっ。コラ！！！1年何やってんのぉ！？」
私達は後ろを振り向く
「先輩ぃぃ！？」

5話：バスケ復活！？（後書き）

小説ランキングあがったり落ちたりの繰り返しですが3ページ目には行かない様努力したいです；；；
もっと言い文章を書けるように頑張ります。。

6話：運命の教室！？（前書き）

話が動いてきました～

6話：運命の教室！？

6話：運命の教室にて
美咲達はたまたま通りかかった部の先輩に
見つかって連れ戻された。

俺はバスケをしている。
こんなちゃんとやるのは久しぶりだ。
なんて言っても今日と明日の試合だけだけど
吏緒とパスパスをした後シュート練習を軽くする。
女バスがこっちを見ている
「吏緒も大変やなぁ～」
「あ？何が？」
「女バス見てるじゃん」
「あぁ。俺じゃないだろ。だって普段あんなんじゃないし。
ハルがいるからだろ」
そういわれるとなんだかテレくさい。
自惚れてる暇じゃなかった
それから3ポイントラインからのシュートと
明日の試合に備えてのミニゲームをやったり
した。
その後ミーティングで試合についての詳細が
話された。
「会場はココで参加校は6校で3チームずつ。
うちの学校では金沢チームと日向チーム
燈花チームの3チームだ。燈花チームの1人の
空きに相川が入れ。持ち物は今から配布するプリントに書いてある
から良く読んでおくように。
それと～相川」

と顧問は俺を見て笑いながら
「明日逃げるなよ」
ぬ。本当の俺がデビューしたって言うのに。
周りに笑われる。
笑うなコラー！！
「逃げはせん」
そう言って俺は俯く。
そんな新手のイジメのようなミィーティングは終わりバックを教室に置いて来ていたので教室に戻る事にした。
体育館を出るときに吏緒が
「マジで明日逃げんなよぉー」と
ニッと笑った
「分かりましたよ。先輩」
わざとらしく敬語を使って教室に向かった。

俺のクラスの教室に入ろうとすると眩しい夕日の光がドアから出ていた。
入ると逆光で良く見えないが人影があった。
目が慣れてきてやっとその存在を確認する
美咲か・・・・
って。
こんなこと前にも無かったっけ？
あぁ夕日の再会（仮）の時か。
ってか俺と美咲は放課後の教室が運命のポイントの様だ。
美咲は俺に気付き
「あ。羽流葵・・・・今日は部活でたらしいね」
「うん。まぁな」
「やっぱ燈花先輩と羽流葵は人気だね～」
「吏緒の人気は確かだけど俺はどうかな」
俺はバックの荷物を整理しながら美咲と話す

「羽流葵って変わったよね」
「んあ？そんなこたぁないぞ」
「じゃぁ好きな食べ物は？」
ベタなトコからついてくるなぁ
「かた焼きそば」
ぁ。変わってる。と言った後に気付いた
「羽流葵が好きだったものはカレーライスでした」
「うっ・・・そりゃ好みぐらい変わるさぁ～」
「それじゃぁさ・・・・」
「ん？」
「羽流葵が願ってる事は？」
あぁ。その質問なら変わってない。
俺は手を自分の前に出して人差し指を上げてその手をじっと見ながら話す
「１つ目が皆平等であること」
美咲は黙って聞いている
「２つ目は人を幸せに出来る事」
「３つ目は・・・・これが全部叶う事」
こんなベタな願いを笑う奴も少なくない。
奇麗事とバカにする奴だっている。
偽善者だろ。と話を聞かない奴だっていた。
だが俺のこの意見は変わらなかった。
この思いが変わらない限り俺は変わらん。
「相変わらずだね・・・・でも良かった」
と微笑む。
美咲にもこれは腐るほど話してたから良く分かってるんだろう。
（でも・・・絶対まだハルくんと美咲ちゃんは繋がってるよ）
また玲那の言葉を思い出してしまった。
やり直すなんてあるわけなーい
何かドキドキっうか何か気分が冴えない。

「あたしは～・・・・その、燈花先輩より羽流葵
の方が、いいと思うよ？」
前、誰かに聞いた話だと1年の女子にとっては吏緒はお兄さん質で
人気がある。
俺もルックスで売れているが～・・・・
って、はえ？
「それはさ、あたしが燈花先輩のコト良く知らなくて羽流葵の事は
人並み以上に知ってるからかもしれないけど・・・」
俺は顔を上げて美咲を見る。

まさかこの教室が本当に俺の運命を変えてくれちゃうかもしれん。

6話：運命の教室！？（後書き）

美咲が何でこんなこと言ってるのかに期待ですね～
特別な意味があるのか無いのか。。

そして評価があるという事を初めて知りました！！
読ませていただきました
3話の件は訂正しました。ご迷惑をおかけしてすみませんでした（ω；
そしてご指摘の方ありがとうございました～！
極力努力して皆様に読みやすいように頑張りますっ
また何か不備、意見がありましたら何なりと書き込みをお願いします！
σ（・ω・、は叩かれて大きくなる性質なので（ぉ

7話：アホ上等。でもヘコむ。（前書き）

バカじゃありません。
アホです。

7話：アホ上等。でもヘコむ。

（まさかこの教室が本当に俺の運命を変えてくれちゃうかもしれん）
結果から言うとそんな訳なかった。
「それはさ、あたしが燈花先輩のコト良く知らなくて羽流葵の事は人並み以上に知ってるからかもしれないけど・・・」
「・・・・・お前・・・・・」
立て続けに俺が言う
「お前。なに笑いこらえてんじゃー！！」
そう。俺は美咲の話しを聞いている間、体が暇だったから引き出しの整理を始めていた。
そして何かまさかの告白！？
みたいな風陰気になったから顔をあげて見てみると
美咲が笑いを堪えて喋っているのだった。
流石に俺でも少しでも信じちまったのは自分のアホさを感じた。
結局俺はからかわれていただけだった。
いつから美咲は世間で言う「S」になったんだ？
何故か今後が不安になってきた俺がいる。
「付き合ってれん。帰るわ」
外面に焦りを見せないようドアをを出たら
「あっ！ちょっと信じたぁ？」
と笑い混じりに言われたが俺は逃げた。

バスケの試合のコト。
久しぶりに試合に出たとはいえ俺は元々運動神経はいいから結構活躍できた。
吏緒も誉めてくれたし、バスケ部員にいいところを見せたのでまたしばらく部活に出なくてすむ。

季節はもう夏にむかいはじめている。
俺は今まさに学校に向かっている。
ところがいつもより生徒が多い。
なんて遠まわしな言い方をしてみたけど面倒くさいので単刀直入に言う。
今日の俺はいつもより早く家を出たのだ。
結構前に語ったと思うが、俺は通常はＨＲ５分前
ギリギリにつく。
でも今日は違う。
何て言ったっていつもとは１５分前に家をでたからだー
えっへん。褒め称えろ。
と心の中で胸を張ってみた・・・・が、虚しいからやめよう。
まぁ俺が言いたいのは今俺が登校してる時間が普通だから人通りも多いわけだ。
以上
最近アホになってきた。

教室に着くともう既にざわついていた。
どうせ早く登校するなら誰も居ない時間に来たかったなぁとか無理なことを考える。
「・・・・・・？」
席に着こうとすると颯真が時計と俺をジッとみてくる
「あん？」
ちょっと不機嫌そうに言ってみた
「おま、相川くんですよね？」
「そうですけど？てか何で敬語なんだよ」
「時間分かる？」
あぁ、颯真は俺がこの時間に居ることが気に食わないのね。
「そういえば美咲はどうしたんや？」
「・・・・・ハルってさ、綾瀬の事を美咲って呼んでるけどさ～・・・

・前に言ってただろ？昔、ハルと付き合ってたって。それってマジなのか？」
「ぁ～俺トイレ行くわ」
席を立とうとすると颯真がガシッと腕を掴んだ
「言え」
「何で言わなきゃならんねん！？」
「昼飯奢ってやろうか？」
そう言われ黙って席に着く
やっぱ俺はアホだ。
「そんで綾瀬と付き合ってたんだな？」
「あぁ」
面倒なので窓を見て朝練に励んでる人たちを眺めながら颯真の質問に答える。
「今はやり直そう的な話は無いんだな？」
「あぁ」
「絶対だな？」
「あぁ」
「・・・・・真面目に答えてるよな？」
「あぁ」
「あぁ。しか聞いてないぞ！！」
「答えが肯定なんだから仕方ないやろ」
「確かにそうだけど・・・・」
「てかさ、何でそんな気になんの？」
「それは～・・・・えっと、深い事情だ」
コイツ絶対美咲のこと好きだな。
「ま、まぁ。ハルと綾瀬はもう何ともないんだな？」
「さぁ、どうだやろ？」
とニャッとしながら言ってみた
「お、おいおいおいおいおい」
あからさまに颯真が焦ってる。

楽しむのもいいかと思ったが不機嫌を買って昼飯がなくなるのも嫌なので
「冗談や。気にすんな」
その時丁度ＨＲ開始５分前のチャイムが鳴った。
いつもならこの時間に俺が来るのか。
朝練が終った生徒も教室に入ってきてる。
深川も帰ってきた。
「おはよー」深川
「おはよう」俺
「うん」颯真
「それじゃ昼飯奢れよ」
そう言って俺は笑う。
そこで空かさず深川が
「何々！？北岡が昼飯奢ってくれんの？」
食いついてきた
「おぅ。颯真、深川の分も奢ってやれよ」
そして颯真はうなだれる

授業中深川が話しかけてきた
「ねぇねぇ」
「ん？」
「北岡って美咲のこと好きなの？」
「何でや？」
「最近美咲のことばっか聞いてくるから～」
「ほぇーぁ。まさかお前、颯真のコト好きなんか？」
「はっ！？んなわけないじゃん！」
全力で否定している。
「顔赤いぞ？」
「ちょ、勘違いしてないよねっ！？」
まさか本当に颯真が好きってことはないよな？

颯真も顔は悪くないから一目惚れってケースも少なくないんだけど、
性格がアレだから彼女は滅多にできない。
深川は颯真の性格とかも知っているはずだ。でも颯真を選ぶのか～
ぬぅ。
物好きがこんな近くにいたとは。
お赤飯炊いておこうかな？
俺はそんなことを考えながら寝ようとすると
「あんたはいんの？」
「いる？何が？」
「だから、好きな人」
「ん～・・・」
しばし考える。ここはマジメにいないと答えるべきか意外性を
つくべきか・・・・
「深川が好きや」
笑い混じりに言ってみた
「はぁ！？」
ヤバ。怒り出してる。ごめんなさいごめんなさい。
「もち。冗談です」
顔がひきつってるのが自分でも分かる。
怖いです。殺気で満ち溢れてます。
殺気？
そういえば美咲が元カノってコトを言っちまった時、深川と颯真か
ら殺気だったオーラが出ていたのを思い出した。
颯真は美咲が好きだから分かるとして。
じゃあ何故に、深川もあの殺気が出ていた？
・・・・・・・・・・え？
まさかさぁ。そんな訳ないやん。
でも・・・・

7話：アホ上等。でもヘコむ。（後書き）

次話へのヒント：ハルは結構、勘がいいです（ワラ

8話：恐怖の告白！？（前書き）

これからが大変。

8話：恐怖の告白！？

俺的解釈。あの殺気は颯真は美咲が好きだから付き合っていたという事実を知り嫉妬。
深川は・・・・俺が好き？
ぁ。違う。深川は美咲のコトが好き！？
なーんてね。
深川が好きなのは颯真だろうなぁ～
前回に引き続いて見事なアホっぷりだな・・・・

「颯真、昼飯奢ってくれや」
昼休みになるなり俺は颯真の席の前に立って
言う。
「深川も来るやろー？」
「ぁ。ごちになりまーす」
「おっ、おい。俺は2人分しか金を持って～・・・・」
俺と深川は颯真の声は全く聞かず、サイフだけを奪って二人で高笑いしながら学食に向かった。
「えっとー焼きうどん2個とコーラ、オレンジジュース1個ずつお願いしまーす。深川も遠慮せず選べぇ」
「うちは、ミルクコーヒーとカレーで」
「あぁ？それだけでいいんか？遠慮すんな、どうせ颯真のサイフやし」
「い、いや。太るしね？」
またちょっと深川の顔が赤くなったような気がする。
やはり颯真が好きなのか。
颯真が来ないので向かい同士で1つずつ空いている席を見つけて俺たちは座る。
早速俺は焼きうどんを食べながら話す

「なぁ、お前って颯真の事好きなんやろ」
「ぶっ！だから何で！？」
「いや、お前は俺的に結構遠慮無しの凶暴女な訳なんや。だけど颯真の金を遠慮した。これは恋愛感情やろ？」
「・・・・・・・ったく。あっちで食べてくる」
「あぁ？」
図星ね。
でもちょっと悪かったかな？
後で謝っとこう。
焼きうどんを完食してコーラを飲みながら
オレンジジュースは手に持って教室に戻る。
教室では既に深川は戻ってきていて友達と話していた。
俺は席について前で顔を伏せて「うぅぅ・・・」
と唸っている颯真に話しかける
「飯食ってないのか？」
「お前がサイフ持ってんだろうがっ！」
泣きながらガバッと俺の方を向く。
「あぁ。そうだったな。返すよ」
颯真のサイフをポケットから出して渡すと勢いよく中身を確認している
「うわぁぁぁぁぁ」
今度は俺の机にうな垂れた
「腹空いてんのか？」
「誰のせいだよっ！！！」
ナイスツッコミ。
「悪かった・・・これ飲むか？」
そう言って飲んでいたコーラを差し出す
「飲みかけっ！？しかも炭酸抜けかけてるっ。普通「金返すよ」とか、そっちのオレンジジュースくれるとかあるだろっ！？」
「贅沢言うな。このオレンジジュースは俺の生命がかかってるんだ」

「ちっ。この恨み忘れんぞ」
ブツブツいいながら炭酸が抜けている飲みかけコーラを飲んでいる
颯真であった。

キーンコーンカーン～・・・・
チャイムと同時に生徒が席に着き始めた。
深川も席に戻ってきた。
俺はニッと笑顔を作り深川の方を向く
「さっきは悪かったな」
なるべく甘いベールで言う。
「・・・・・今日も部活でないんでしょ？放課後誰も居なくなったら教室きてくんない？」
深川は小声で言う。
「え？」
待って。俺、今日殺される??
「本当にすみませんでしたっ！！！」
俺は立ち上がって思いっきり頭を下げる
そうするとさっき深川が一緒に話してた女子がこっちを見て笑っている
あいつらに殴られるっ・・・・・・
キーンコーンカーン～・・・・・
本鈴のチャイムが鳴り一気に教室が静かになった。
次の教科の教師は厳しいから皆、喋れない。
でも放課後って深川達は部活あるよな？
なーんだ恐れる事は無いさ～
ぁ。オレンジジュース渡しそびれた。
まぁ放課後教室行ってもしも深川がいたら渡すか。
深川のご機嫌直しに渡そうと思っていたオレンジジュースをバックに放り込む。

ＨＲが終わり教室に誰も居なくなるまでどっかで暇つぶししようと
トイレに行ったり手を洗ってみたり
していたら殆どが部活に出たり帰ったりした。
俺は教室をちらっと覗いてみる。
まさか集団で鉄の棒とか持ったりしてないだろうな？
一人の女性がいますね。
中には入らないで会話する。
「ボコすの？」
肩をすくめて弱気な声で言ってみる
「はぁっ！？何でウチがボコさないといけないの！？」
この反応なら大丈夫だ。
教室に入る。
「そんで何で呼び出したんや？部活は？」
「あぁ～・・・・部活はちゃんと許可得たから」
「へぇ。そんで要件は何や？あ、昼飯の事だったら謝る。悪かった」
俺は自分の席にいきお詫びのオレンジジュースを取り出す。
「お詫びの印にこのオレンジジュースを～・・・・」
ジュースのパックを持ちながら振り向くと2歩くらい前に深川がいた。
「・・・・っ！？」
俺がジュースを持っていた手を握り
次の瞬間深川は背伸びをし、俺の唇を奪う。
意味が分からない。
だがそんな事は今は考えられない。
とにかく今の現状を把握するのが精一杯だった。
しばらくたって唇が離された時俺は言葉を発しないとと衝動に駆られ考えもせずこう言った
「罰ゲーム？」
深川の顔を見ると今までに無い程赤くて泣きそうだった。
でもまだ手は握られたままだった。

「美咲が転校してきた時、何で席譲らなかった理由分かる？」
小さめの声で言われた。
「俺が変わんなっうたから？」
「それもある。でも一番の理由はウチだけが羽流葵の隣で居たかった」
「・・・・・・・」
「その前はあんま意識してなかったんだけどね」
「でも、美咲の元カレが羽流葵だったって知って凄い悔しかった。でもそれから意識し始めるようになってさ。そんでね。自分勝手かもしれないけどウチが北岡のこと好きって羽流葵が言い出したときは辛かった。
だから学食でもあんな態度取っちゃって。ごめんね。
・・・・でもウチは羽流葵の事好きだから！！
さっきも突然キスしちゃってごめんね・・・・」
これが世間で言う告白か。
生憎、俺は深川の日々の襲撃に耐えられる程
強くないんだ。
「ごめん・・・・・な」
深川の顔を真正面からきちんと見て言った。
ケジメはつけなきゃいかん。
「俺はそこらのチャラ男じゃないし、
告白されて振って傷付けるのが怖い。だから付き合うなんてしても結局、別れる時に一緒に居た時間が全てお互いの傷になる。そんな事はしたくない。
だから・・・・・ごめん。気持ちは受け取れん」
俺はしっかり頭を下げる。
「ははっ。こうなるとは分かってたんだけどさ。
自分が納得行く時に告ろうと思ってね～
そりゃちょっと後悔はしてるし1週間は病みそうだけどさ、でも良

かった。ありがとね」
深川は涙を堪えながらも笑顔を作っている
「えっと～・・・・吏緒とかどう？」
おい。何、恋人候補紹介し始めてんだ。俺。
「燈花先輩？確かにカッコいいと思うけど・・・・・
ウチにはしっくりこないかな」
これで「ふざけんな」とか蹴り飛ばされたらどうしようかと思ったけど良かった。
明日から俺らは気まずかったりするんだろうか？
「後さ、振られついでにお願いあるんだけどいい？」
「ん。なんや？言ってみ」
「明日から名前で呼んでくんない？」
「・・・・・な、棗？」
「疑問系じゃなくていいから。普通に」
「しゃーない。そんぐらいやったるか」
「ははっ。ありがと！これで後悔度が結構下がったよ～」
「そりゃ。良かったわ」
「あと、今日のコトが無かったことにされちゃうのはヤダけど、明日からは気にせずいつも通りに普通にしてほしいんだけど～・・・いいかな？ウチも普通にいじめるから」
「いじめられるのは困るんやけど、俺は普通に接する気やから心配せんでええよ」
「流石羽流葵だねっ！それじゃ振られた事を報告しにでも部活いってきまーす」
「あんま俺を悪もんにすんなよ～」
深川はドアに歩こうとすると床に落ちていたオレンジジュースを手に取ると
「これ。ありがと。貰っとくよっ」
「ぁ、おう」
「それじゃ」

とジュース片手に教室のドアのところで一度立ち止まり
「当分は羽流葵のコト好きだから気が変わったらいつでも言ってね〜」
と言い残し笑って去っていった。

8話：恐怖の告白！？（後書き）

やっと恋愛物語っぽくなってきてくれて・・・・
でもまだまだ自分で読んでて他の作品のような感動が得られません；；
もっと勉強して磨きをかけたいと思います！

9話：颯真くんの本気（前書き）

玲那、颯真、吏緒。動きます。

9話：颯真くんの本気

俺は1人になった教室でガタンと椅子にすわる。
さっきの告白は幸いなことに深川が怒り出すこともなく無事に解決してくれた。
だが問題が一つ。あの時は気付かぬフリをしていたが・・・・・
深川にキスされてる時に一瞬廊下のところに人影がちらっと見えた。
正確には誰だかは分からないけど。
別に俺が振ったというのはいいとしてもあの現場を見られたのはちょっと嫌だ。
クラスメイトか？
それだったら尚更まずいな。
「帰るか・・・・」
そう呟いて教室を出る
「！？」
「ぁ・・・・」
「何やっとんねん！」
ドアを出た床で壁に寄りかかってる玲那を見て言う
「いやーハルくんはもてますねぇ」
「さっき居たのって玲那だったんか？」
「まぁ・・・うん。ちょっとこの教室に用事があってね。
そんで来たらこんな光景が～・・・」
「忘れろー」
まぁ、見られたのが玲那で良かった。
「結構可愛い子だったじゃん。何で振ったの？
・・・・好きな人いるとか？」
「外見に騙されちゃだめだっ！アイツは中学の時に夜の校内に忍び込んで窓ガラスを割って回ったんだ！」
「何、そのベタだけど絶対に実行されない不良行動ランキング1位

みたいな嘘は」
「まぁそれをやりかねんくらい恐ろしい人なんですよ」
「ふぅん。ぁ。これこれ」と玲那は俺のクラスのファイルを取る。
「このファイル取りに来たんか」
「うん。校庭まで一緒に来てくれる？」
「どうせ帰ろうと思ってたかんな」
玲那と肩を並べて歩く。
昇降口で靴に履き替えながら外を見ると女バスが外練をしていた。
あ、ちなみに深川が入っている部活動は女子バスケ部である。
陸上部である玲那と一緒に外に出る
「それじゃ、ありがとー。バイバイ～」
ブンブン手を振って走ってった
女バスの視線がちょい痛かった。
逃げるように帰る。

ふぁぁ。
眠い眠い。
今日はいつも通りにＨＲ５分前に到着。
俺が席に着くなり颯真がいきなりバッと後ろを向いてくる。
「あん？何じゃコラ？」
「話がある。真剣な」
颯真は結構真剣な顔だった。
まぁ話の内容はどうかな。
美咲と深が～・・・・棗、はまだ朝練のようだ。
「お前。今は綾瀬とマジでなんもないんだよな？」
「は？何でそんなこと・・・・何も無いわ」
「それじゃぁ」
颯真は俯きかげんにキリッとした目つきになる。
！？
誰が見ても颯真だとは分からないだろう。

かっこよすぎる！！
常にこんな感じで落ち着いていれば絶対モテるね！
「美咲を貰いに出る」
今までに見たことの無いような声色と顔つきで言う。
「あぁ！！？」
あ、あれ？何で俺はこんなムキになってるんだ？
「・・・・・んだよ！お前やっぱ綾瀬のこと好きなんじゃん！」
「ちげーよ！！あ、あれだ！今のはお前が美咲とか言ったからや！」
「そ、そんぐらい別にいいじゃねーか！なんでムキになるんだよ！」
周りは気にしないで俺らは机をバンバン叩きながら大声で会話していた。
「だって勝手にいきなり名前で呼ぶとか・・・・なぁ？」
俺は一度落ち着いてイスに座る。
颯真も座る。
「もうなんも無いんだったらいいじゃねぇか。俺だって勝負出てぇんだよ・・・・
俺なんかじゃ綾瀬は振り向いてもくれねぇかもしれないけどさ、友達の元カノだろうと、本気だから」
「勝手にしやがれ」
「ってぇぇ！？綾瀬居るっ！？」
と颯真は焦って隣を見た。
でも幸いな事にまだ美咲は来てなかった。
その代わりに深川が戻ってきていて俺らの方をビックリしながら見ていた。

授業中に俺は頭を捻る。
授業の内容にではなく、さっきの颯真との会話のこと。
何故俺はあんなにムキになった？
まだ美咲に未練があるとか？
いや、違うな。これはあれだ。

颯真みたいなおちゃらけた男に美咲を取られるのは何か
イヤだっただけだ。
1人娘を嫁に出せない父親みたいな感じだ。
そうだ。うん。
「ね、ね」
棗がシャーペンの芯が出てるところで突っついてきた。
「痛ぇよ。何や？」
「朝、颯真と話してたのって美咲のことでしょ？」
「あぁ。そうだけど」
「羽流葵って美咲の事好きなの？」
「い、いや。そんなことは・・・・」
「ウチとしては不安なわけよ。ま、振られたんだけど
羽流葵が彼女作らない限りまだチャンス
あるってことだからね～」
「ま、頑張れや」
ぁ。今の人事だったかな。

「颯真～学食いくべ」
今だに寝ている颯真を叩き起こす
「んあ？」
やっぱり朝のは別人だったのか・・・・
ちと、残念。
学食に行くと珍しく吏緒と玲那が二人でいた。
話かけ辛そうな風陰気でもなかったので声をかけた
「二人とも今日は学食なんだ」
「ぁ。ハルくんだ～」
「ハル！丁度いいところに来たな」
「ん？」
「さっきたまたま玲那と会ってな。
ハルは今週の土曜日空いてるか？」

「えっと～・・・・特に予定は無いで」
「おぉ！良かった。それじゃ、美咲ちゃん
おかえり記念で美咲ちゃんと玲那とハルと俺で久寿川ランド行こう！」
久寿川ランドとはここら辺で一番大きいテーマパークである。
「俺は構わんが・・・・って美咲のお帰り記念にしては遅すぎじゃあらへんか？」
「いいんだよっ！そんな細かい事は～」
と玲那に流される
「そういうことだ。ハルは美咲ちゃんを誘っておいてくれよー
都合が合わなかったら直ぐに俺にメールくれ」
「オッケー」
「おい！俺も連れて行ってくれないか！？」
颯真が身を乗り出してきた
「北岡君。だっけ？」
吏緒が颯真をみて顔をしかめる
「ハルと一緒に遊びたいのは分かるが今回は～・・・」
「い、いやっ！ハルと遊びたいんじゃなくて、その・・・・」
美咲と居たいわけだ。
「颯真。諦めろや。俺はアホな真似はせんと思うから。安心せえ」
「・・・・絶対だぞ」
どうかな。
そう言おうとしたがまたややこしくなりそうだったのでやめた。
４人で遊園地かなんか行こうというのは実は前々から計画されていた。
それは吏緒が玲那を好きだから。
このタイミングに話を持ちかけたのは俺と美咲もついでにくっ付けちゃおうって話だろうな。
まぁ美咲とまた何か起きるってことは無いと思うから
俺はこの計画に参加した。

全ては吏緒と玲那を幸せにする為に。
俺の予想では二人は両思いだと思うから
後はお互いが気付けば全てオッケーなわけだ。

「ねぇねぇ！玲那の好きな人って誰なのぉ～？
いい加減教えてよー」
授業中だが周りの友達と恋バナになってしまった。
以前あたしには好きな人がいると口を滑らせてしまったのもあって
何かと聞き出される。
「ん～誰だろうね」
苦笑いしながら誤魔化す
「じゃあヒントちょうだい！先輩？後輩？同級生？」
これくらいならいいかな・・・・
「えっとぉー・・・・後輩。かな？」
あえて疑問系で言ってみる
「えぇぇ！？燈花先輩じゃないんだ？」
皆あたしと吏緒が仲いいからって勘違いしているらしい。
仲がいいって事なら・・・ハルくんだって考えられるのに・・・・
そんな似合わないのかなぁ。
相当悲しい。
「1年ってことだよね。やっぱ、かわいい系？」
あたしの好きな人はかわいいとは言い難いだろう。
でもバスケをして笑ってる姿や普段ぶっきらぼうなのに必要な時に
傍に居てくれる。
年下なのに頼れる。そんな人。
「ん～・・・・」
曖昧な返事をする。
「まさかさ・・・・相川くん？」
ピンポイント。
よくよく考えてみれば1年に中のいい人はハルくんぐらいしかいな

い。
はぁ・・・・どうしよう。
否定するのも辛いし肯定しても色々問題が～・・・・
しかも今ピンポイントで当ててきた友達が正に
ハルくんの事が好きなのである。
ここは・・・誤魔化しておこう。
「ハルくんは昔からの友達ってだけで、弟みたいな感じ？
だから恋愛感情とかないからっ」
なんともベタな誤魔化し方。これしか言葉が見つからなかった。
でも大抵小説やドラマではこういう人ほどその人を好きだったりする。
うわぁ。ベタな恋愛してるんだな、あたしは。
「そうなんだ・・・良かった」
ハルくん好きな友達がホッと安堵の息をつく。
やっぱりハルくんは学年問わず人気がありすぎる。
でもあたしは皆よりちょっとでも近くにいる。
その現実がハルくんへの思いを一層強くする。

9話：颯真くんの本気（後書き）

そろそろハルも動いて欲しいものです。
てか勘違いしすぎですね（ワラ

１０話：Ｗデート！？～過去の記憶～（前書き）

この回では美咲とハルの回想が主です～

１０話：Ｗデート！？～過去の記憶～

昼休みが終って俺がマジメに社会の授業を受けようとしているのに対して、颯真はずっと
「遊園地で綾瀬に手だすなよ！」とか
「実は付き合ってるんですとかやめてくれよ！？」
とか色々話してくる。
鬱陶しいので全てシカトしてるわけだが・・・・
そうか。美咲を誘わなくちゃいけないのか。
しゃーない。棗は隣で爆睡中だし、今誘っとくか～
俺は美咲の方を向きシャーペンでつつく
「なぁ。土曜日って暇なんか？」
「今週の？特に予定はないけど」
「そっか。お前とお俺と吏緒と玲那で久寿川ランド行こうって話になったんやけど・・・どうや？」
「楽しそう～全然おっけーだよ」
その後授業と颯真はほったらかしにして美咲に土曜日の詳細を話した。

その策略と陰謀が混じったＷデート作戦が実行される日。
俺は待ち合わせ場所に向かっていた。
時間は早すぎるわけでも遅いわけでもない。
むしろ早めにきたはずだった・・・・
「おっ！ハル！遅いぞー」
「早いな・・・・ご苦労さん」
全員揃っていた。

時間が勿体ないからということで早速
久寿川ランド行きの電車に乗る。

席は同じ車両に2人分空いてる席が少し離れているが
2つあった。
これは吏緒と玲那。俺と美咲という席位置にするため
やや強引に
「美咲ーあっち座ろうや」と誘導して並んで座る。
そして必然的に吏緒と玲那が隣同士になる・・・
はずだった。が。
吏緒と玲那が座るはずだった席に買い物袋をもったおばさんが
座ってしまった。
これはまずい。
今俺と美咲が座っているところにあの2人を座らせる手が
妥当だと考えたが美咲は今日の遊園地に行く本当の
目的を知らないわけだから不自然すぎる。
他に空いてる席はと見渡すが立っている人もちらほらいて
微妙な隙間くらいしかなかった。
俺は誰にも聞こえない声で呟いた
「ごめん。吏緒」

最初は2人が気になったがドア際の所で並んで話していたので
これはこれで悪くないんじゃないかな。
と思い俺は美咲と話していた。
ここから目的地まで電車で1時間くらい。
だんだん席が空いていき、吏緒と玲那は俺達から少し
離れた場所で2人で座っていった。

美咲からは海外に行ってたときの事とか色々聞いた。
そして今の日常の話題も話し尽くし自然に昔の話
になっていた。
「秋月先輩と付き合ってたってマジなの？」
「俺が玲那と？んなことあるわけないやろ～

噂は色々立ったみたいやけど実際にはんなことあらへん」
「そうなんだ。あたしと別れた後、誰かと付き合った？」
「俺はそこまで軽くあらへん」
「ぇ・・・？じゃぁ今好きな人とかいる？」
俺はずっと外の流れる風景をみながら話していたが
この質問にはビックリして美咲の顔を反射的に見る。
不意に目が合うが俺は直ぐに逸らす。
「んー・・・居ないかな」
「あっ！羽流葵の標準語、久しぶりに聞いたような気がする～」
ちょっと焦っていたせいかなまりが無かったらしい。
（間もなく、久寿川ランド前～御出口はー・・・・）
車内アナウンスが流れる
「おーい。この駅だぞ～」
吏緒と玲那がこっちに来た。
「おっ！やっとついたかー」
俺は軽く背伸びをして電車を降りる。

無事に入園を済ませ貰ったパンフレットを見る。
俺はその間に今日の計画の事を考えていた。
まず、この人ごみだ。
俺と美咲は行動を共にし、吏緒と玲那と自然に別れる。
俺はそれだけの事だけに来たわけでもない。
かといって美咲と復縁するためでもない。
唯純粋に楽しもうとしてる。
前には玲那と吏緒が。その後ろには俺と美咲が配置されている。
てかまずいな。
こんな人ごみでは吏緒ペアとはぐれるどころか美咲とはくれてしまいそうだ。
さっきから容赦なく俺と美咲の間に人が押されて食い込んでくる。
どうにか人並みに流されないで美咲を見失わないようにする。

さっきから人の足を踏んだり踏まれたりしているがこれは仕方ない。
美咲は・・・・大丈夫だろうか？
これは仕方ないよな。
俺は丁度、人波が少し途切れた瞬間に美咲の手を掴む。
今美咲がどんな気持ちかは知らんがこの状況を読んでか
ぎゅっと握り返してくれる。
案の定、早すぎるが吏緒たちとはぐれた。
俺達は広い休憩場的な椅子と机が並べてある場所で
座った。
皆アトラクションに夢中でここは昼時でもないので
空いていた。
当たり前だが繋がれていた手はどちらからともなく
離された。
「はぁ・・・凄い人だね～・・・お祭りみたいだね。
しかも秋月先輩達とはぐれちゃったし」
離れたところに見える人の波を見ながら美咲は言う。
「せやな。吏緒達はうまくやってるやろ。心配せんでいい」
パンフレットを見てみる。
「そうだね～てか、前も2人で一緒にここ来たよね」
2年以上も前の事だが俺も良く覚えている。
俺は記憶を蘇らせ開いてあるパンフレットの園内案内を
美咲とデートした時の道筋を指でなぞる。
最後に乗った定番の観覧車に指を当てた時に思い出した。
「最後に観覧車とかベタだねー」
って話しててゴンドラが下につく寸前に俺が
「それじゃベタついでに」と美咲とキスをした。
美咲もそんなことを思い出したのかちょっと沈黙が流れる
「最初に何に乗ろうか迷っててもしゃーないし。前に来た時
と同じルートにせんか？」
まぁ前来た時とは美咲との関係が違うけど・・・・

「よしっ！さっそくいこー」
テンションがやたら高いが・・・気にしない事にしよう。

１０話：Ｗデート！？～過去の記憶～（後書き）

久しぶりの投稿ですが読んでくれている方に感謝を込めて投稿です（ＴωＴ）

１１話：全てはシナリオ通り？（前書き）

それぞれの幸せって何なんでしょうね？

１１話：全てはシナリオ通り？

「うぅ・・・美咲・・・・はぁ・・・・はぁ・・・だめだぁ・・・・うっ」
コラ。やましい想像をしたらダメだぞ！
一応、全年齢対象なんだから。
何故に俺がこんな息を上げなきゃいけないのかと言うと
昔、美咲とデートしたルート通りに回ってる訳だが昔は何を
考えてたのか知らんが絶叫系を４つも連続で乗ったのだ。
その割りに美咲は凄く元気で小走りして
「次はコーヒーカップいこ？」
とか言い始めている。
いや。もう無理だから。半ば吐きそうになるのを
抑えている。
昔の俺はコレに耐えていたんだっけ？
頭がグワングワンして思考がうまく・・・・・
時刻は１２時３０分を指していた。
「昼飯にしよう。な？」
「そうだねーお腹すいたし」
そういえば吏緒と玲那はうまくやってるだろうか。
どうも俺と美咲の２人で来たと言ってもおかしくない状況だな。
一歩踏み出すと足がふらついてしまう。
俺はつい反射的に美咲の腕を掴んでしまう。
こういうのって普通女を男が支えてあげるシチュだよな・・・・？
「ちょ！羽流葵？大丈夫？」
「ん・・・あぁ大丈夫。ごめん」
近くにあった飲食店とおみやげ屋があるトコに入って
入り口の近くにあったベンチが空いていたので座った。
美咲も隣に座り俺の顔を覗き込んでくる。

「本当に大丈夫？羽流葵って前から絶叫系苦手だったっけ？」
「いや・・・苦手ではないけど、４連続は流石に無理や・・・」
何故美咲はそんな元気なんだ？
「でも前は全然ヨユーだったじゃん」
「今と昔は違うやろ」
そうだ。今と昔は変わっている。
「違う。か・・・・永遠に変わらない事なんて無いんだね・・・・」
「ん？」
今、美咲が何か言ったように聞こえたがハッキリ聞き取れなかった。
「それじゃ、そこで食事しよー」
「おう」
昼食をとり、俺は完全復活して美咲は相変わらずのハイテンションだ。
そして引き続き俺らは2人でルート道り回ていた。

「はぁ・・・・」
４人で遊ぶ為に来た筈の遊園地だったが直ぐにハルくんと美咲ちゃんと
離れてしまって今は吏緒と一緒に何個かのアトラクションに乗った。
そして今は座って昼食をとっている。
今日はハルくんと一緒にいられると思っていたのに。
それどころか電車の中でも離れてたし、まだ一度も会話を交わしていない。
「次は何乗ろうか？」
吏緒が聞いてくる。
「ねぇ。そろそろハルくん達と合流した方が・・・」
「こんな人ごみで見つけるのは無理だろ」
「携帯は？」
「電源が切れてるらしい」
「そっか・・・・」

ハルくんと美咲ちゃんどうしてるだろ。
凄く不安になる。
早いうちに自分の気持ちを伝えておいた方がいいのだろうか。
でも前にもハルくんを巡っての玉砕を見てしまったし今の
関係が崩れたらどうしようとか色々考えて踏み出せない。
恋愛は「好き」という気持ちだけでは出来ないと身を持って感じる。
ハルくん・・・会いたいよ・・・

鮮やかなオレンジ色の夕日が園内を照らす。
家族連れは徐々に減ってきて、代わりに若いカップルが目立つ
ようになってきた。
俺等も周りから見ればカップルだろうな。なんて事を考えながら歩
く。
昼食後もバンバン色々な物に乗り殆ど制覇した。
ただ一つ・・・・昔のルート通りに回るのだったら避けては通れない
観覧車。という難問があった。
さっきから乗るか乗らないかを必死に考えていたが結局乗る意味が
ないので乗らない事に俺の中ではなった。
美咲も同じ事を考えているだろう。
そろそろ吏緒達と合流して帰ろうかな～・・・
俺は携帯を取り出す
「どこにかけんの？」
「吏緒や。そろそろ帰るべ」
「・・・・・・」
一旦立ち止まって携帯を操作していると空いていた俺の左手が
無造作に掴まれる。
「うわっ！」
美咲に引っ張られてコケそうになったが足を動かす。
「おい！どこ行くんや！？てかこけるから手ぇ離せ！」
だが美咲は手を握って走ったまま何も言わなかった。

俺は周りが気になって首が動く範囲をみる。
・・・玲那と吏緒？
少し遠くだったが2人が並んでこっちの方に向かって歩いているのが見える。
そして美咲が立ち止まる。
「ん？」
目の前には目立つ観覧車があった。
「やっぱさ。ここまで制覇したんだから全部乗り終えたいじゃん？」
「・・・・しゃーないか。乗るぞ」
「わーいっ」
何人か並んでる列に並ぶ。
2周くらいで直ぐに順番が回ってきてゴンドラの中に入れられる。
無言で向かい合って座る。
美咲は既に窓の外をみてワクワクしているようだった。
俺はその美咲の横顔を見る。
ゆっくりと動き出して徐々に上がってゆく。
夕日が彼女の頬に当たって綺麗なのが良く分かる。
前のデートもこんな感じで美咲の横顔を見ていたのを覚えている。
しばらくして俺も外に視線を移す。
「凄い綺麗だよね・・・昔もこの景色だった」
俺は気付いた。今日のことは全部過去の事がなぞられている。
はみ出したのは俺が絶叫マシーン4連続に耐えられなかった事だけだ。
関係は全く違うのにここまで出来ちゃうもんなんだな・・・
鮮やかに映し出される風景を見ながら俺は関心する。
ゴンドラが頂上まで到達し下りに入った時、美咲に目を向けると目が合ってしまった。
「ん・・・」
つい声が出た。
「あたし未練あるかもねっ」

と美咲が笑う。
何の事か？・・・・・まさかな。
「やっぱ好きだよ」
「は？」

この告白に何も答えられなくて俺は呆然として美咲を見てるしかなかった。
全てはシナリオ通りって事なのか・・・・？

11話：全てはシナリオ通り？（後書き）

ハルくんはモテモテですね（笑
まぁそれが主人公ってもんですか。

１２話：抑（前書き）

サブタイトルの意味は次話に関係します（、

１２話：抑

１２話：抑
疲れた。肉体的にも、精神的にも。

帰りの電車に乗ってる訳だが、行きとは打って変わって
俺の隣には吏緒がつり革を持って立っている。
美咲と玲那は別の車両に乗っている。
少し話は戻るけど、俺と美咲が観覧車から降りた後に
すげぇ気まずくなってたら丁度、吏緒と玲那が居て合流した。
俺が「２人は観覧車乗んないんか？」と尋ねると
吏緒は「あ、あぁ。そろそろ帰ろうか」
と帰る事になった。
そして結果。電車の中でも男女別れてしまってる訳である。
吏緒から今日の詳しい話を聞くと
「玲那さ、すごいつまんなそうだったんだよ・・・・
何個かアトラクションは乗ったもののそれと言って
特に重要な会話は無かったし・・・
何も進展しなかった。それどころか逆に愛想つかされたかも」
「そっちもそっちで大変だったんやな・・・おつかれさん」
「まぁそれはもう触れないでくれ。傷つくから。
ハルは観覧車で告られたんだろ？答えはどう返したんだ？」
「いや・・・あの後なんも話してない」
俺は苦笑いする
「で、どうすんだよ。返事」
「・・・・断る」
「は！？何で？美咲ちゃんのこと好きじゃねぇの？」
「好きってことでもないから」
「そんなもんなのかよ。俺はさ、近いうちに玲那に告る」

「まじか！言い返事だとええな」
「どうだろうな～・・・」

今日は学校あるわけだがちょっと寝坊しちまって
焦って支度したらいつもより早く支度が終った。
だから少し早く登校している。
（ガスッ）
「はうあ！！」
俺は前かがみになって頭から首にかけてを抑える。
「痛ってぇー何するんじゃ！」
誰だよ・・・と後ろを振り向く間でも無く、犯人は俺の前に現れた。
「おはよー」
「何事もなかったように登場するのはやめてくれんか」
「えーだってハルくん怒るじゃん」
「そっちの登場の方がウザイわ！！」
言わなくても分かると思うが正体は玲那だった。
この方は今日大変なイベントが勃発することは知らないんだよな～・・・

普段は玲那は朝練だが、今日から1週間は二者面談があるから
どの部活も朝も午後も休みだ。
まぁ俺は部活には出ないからどうでもいいんだが。
「ハルくん寝癖あるよー」
と玲那は俺の頭をポンと抑える。
「ん？」
俺も頭に手を置くと玲那の手と触れる。
「わっ」
「ぁ・・・ごめん」
驚かれると思ってなかったからつい謝ってしまった。
「は、早く学校行こう！」

玲那は突然走り出す。
「え？おい！」
そんなに走り足りないのか？流石陸上部だな・・・・
俺も少し遅れて走る。

教室に入り俺の席周辺を見ると
颯真、棗。そして美咲も既に来ていた。
「ぉ、おはよー」俺
「はよー」棗
「うぃ～」颯真
「おはよ」美咲
「お前今日、秋月先輩と登校してただろ！
聞いたぞ！深川に告られてたんだってな。
何で言わないんだよ！このハーレム男めぇ！」
「朝からゴタゴタうるせ」
俺は颯真と話しながら美咲の告白のことは
まだ誰も知らないのかと少し安心していた。
今日は午前の授業は学力テストのようなものをやらされた。
美咲とは朝の挨拶以外言葉は交わしていない。

午後の授業は放課後の事を考えていた。
今日の放課後に吏緒が玲那に告白する。
特に協力出来ることも無いので口出し無用だが。

今日はハルくんと登校した。
手があたって動揺しちゃったけど・・・・
自分の机をみる。
端っこに書いてあるハルくんの似顔絵。
友達は大抵休み時間になるとウチの席に集まる。

ハルくんは恋愛感情がある人以外の人も人気はある。だから良く、
ハルくんの話になる。
ウチのハルくんへの恋愛感情は皆知らないけどもちろん話には参加
する。
前にハルくんの似顔絵を皆で描いてみようという事になってウチの
机に皆で描いた。
それが以外に似ていた。
皆の意見で消さないでとっておくことになった。
時々薄くなっているのを上からなぞったりしている。
学校は一緒でも毎日会えるわけじゃないから
寂しくなった時は机を見る。
そうすると会えた気分になって幸せになれる。
時々それを見てニヤけたりしているのは触れないでおこう。

昼休みに吏緒がウチの教室に来る。
用件は
「放課後って部活無いよな？そんでさ・・・・放課後迎えに行くか
ら、待ってて」
「え？何で？」
「色々あるんだー・・・・よ」
「ん・・・・分かった」
何だろ。まぁ大した事じゃないでしょ。
吏緒が教室を出て行く後ろ姿を目で追う。
クラスの女子の殆どが吏緒を見ていた。
流石モテ男。
次の瞬間に女子がこっちに来た
「ね、ね！何だって！？」
ざわざわざわ
何なのかはウチが聞きたい。

期待と不安を胸に放課後になる。
ＨＲが終るとドアの所に既に吏緒がよっかかっていた。
友達はそれを見るなり
「王子様が待ってるよー」
と冷やかしてくる。
「はいはい。それじゃぁね」
軽く手を振って吏緒と並んで歩く。
「これから何処行くの？」
「ちょっとね・・・・・」

１２話：抑（後書き）

次回は玲那の回想が主かもしれません。。

１３話：焦り

「綺麗な所だね～！」
目の前に広がるキラキラ光った川を見て声を上げる。
吏緒に連れてこられたのは学校から１０分くらい歩いたところで
今まで来たことの無い静かな橋の上だった。
人通りも全く無くて、川の水は汚れが殆ど無く
夕日が当たり風に吹かれて光っていた。
「こんな所初めて来た～」
「すげぇだろ？ぶっちゃけ俺も先輩から教えてもらったんだけどな」
吏緒は隣で笑いながら川を眺めている。
そういえば用は何なんだろう。
「これを見せに？」
「あー・・・えっと、そのさ」
吏緒は軽くハニカミながら首筋を指でなぞっている。
緊張するといつもやる癖だ。
そんな大事な話でもあるのかな？
「なんつぅか。ちょっと聞いて欲しい事あるから・・・」
「うん？」
どうやら結構マジメな話らしい。
「この前の遊園地楽しかった？」
それだけ！？
まぁ、本心はハルくんと一緒に居たかったって
こともあるけど楽しくないってわけでもなかった。
「楽しかったけどー・・・なんで？」
「そっか。良かった・・・・俺はめっちゃ楽しかったし嬉しかった。
ハルが玲那の事紹介してくれて初めて玲那の事知って。
俺はあんま女子と仲良くしようとか思って無かったんだけど
玲那は俺に一番近い女で～・・・・その」

この展開って？
吏緒に限ってそんな事はある筈無いよね。
「だから。大切にしたいと思った・・・・」
どうすればいい？
ハルくんが好き。
だけど・・・・やっぱりこんなウチじゃダメなんだね・・・・
「・・・・いいよ」
ハルくんと幼馴染以上になろうなんてずるいよね。
「えっ！？」
「告白でしょ？おっけーって意味」
笑顔を作って言う。
「それじゃ・・・今日から俺らって・・・？」
「カレカノだねっ」
吏緒は真っ赤になりながら自分の顔に手をあてている。
何かウチも照れてきた。
照れ隠しに川のほうをじっと見る。
「やっべ。めっちゃ恥ずい・・・絶対振られると思ってたから・・・・」
「吏緒に告白されるなんて思ってなかった」
「ははっ。今、これ以上玲那と一緒に居たら死にそうだから
ごめん。帰るな！」
「あ。うん。バイバイ」
そういってお互い手を振る。

吏緒がいなくなった静かな橋の上にゆっくりと座る。
まだ顔の熱が残っている。
吏緒の気持ちがハッキリ伝えられて。ウチはそれを受け入れた。
ウチは確かに吏緒だって好き。それでもまだ不安が残ってる。
でもそんな不安さえもなくて、本当に好きなのはハルくん。
一人でグダグダ考えながらハルくんを好きになったのはいつだろう

と過去を思い出した。

「・・・・」

玲那や羽流がちっちゃい時から家がお互い真正面で、年齢は違いながらも良く遊んでいた。

中学も同じで時々一緒に帰ったりもしていたが羽流はバスケ部で吏緒と出会う。

そんで羽流を通して一つ学年が上な吏緒を知った。

その時は吏緒とは殆ど喋らなかった。

理由は玲那は「男子が苦手だったから」

特別に男性恐怖症とかではないけど羽流以外の男子と話したり行動を共にしたりするのは不可能に近かった。

だから年上だからもあって初対面の吏緒ともまともに話せなかった。

ハルくんに恋愛感情に似たものを抱いたのはこの頃だろう。

やっぱりハルくんの隣にいると落ち着く。その気持ちが次第に変化していて、吏緒との接触でその事を更に強く感じた。

ハルをくん付けで呼んでいるのは近づきすぎるのが怖いからかもしれない。

吏緒は吏緒だけどね・・・・

ちょっと前に述べた吏緒と付き合う上で不安が残ってるというのはまだ、完全に2人きりでいる事に慣れていないからだ。

さっき、吏緒と一緒に居た時だってかなりテンパってた・・・・

ハルくんといるときは全然大丈夫なんだけどなー・・・

「付き合ってけば大丈夫だよね」

そう開き直りもう沈みそうな夕日を見てからその場を後にする。

（ドサッ）

「痛ぇ・・・・」
ベットの上で転がってたら落ちた。
何で転がってたかって？
さっき来た吏緒からのメール。

件名：無題
おk

意味が分からんメールだった。
送り間違えたのか？と思って
『送り間違え？』
そう送ったら
『いや。今日玲那に告った！！』
『ぉ！結果は・・・・？玉砕？』
『玉砕はしなかった　笑』
俺はそれを見てやっぱ両思いだったんじゃん。
なるほど。だから一番最初のメールが『おk』だったんだ。
吏緒と玲那が付き合うってことは俺一人やん。
彼女かぁー・・・
そういや美咲との件はあの後、全く触れられてないからこっちからも話さず自然消滅でいいよな。
そんな事を考えてベットで転がっていたら落ちた
ということだ。

何度も言うが俺は部活は無所属だから大抵帰るときは一人だ。
今日も特に変わらずに一人で大人しく帰路につく。
この時間は他の学校の生徒や近くの小学生に良くあう。
知り合いなんていない筈なんだけど・・・・
「相川先輩！」
相川なんて苗字は一杯いるだろうけど条件反射ってやつでつい声の

方を向いてしまう。
でも確かにその人は俺の方に小走りで来る。
もしも俺じゃなかった時に恥ずかしいから俺は立ち止まらずに少し歩く速度を落した。
結構可愛い彼女はやはり俺の前で止まる。
「ん？」
彼女は俺の学校の中等部の制服姿だった。
それでも見覚えがない。
「高等部の相川、羽流葵先輩ですよね？」
「あ、は、はぃ」
年下だがどんな輩か分からないので一応敬語。
胸にかかるくらいまで長く、毛先に軽くウェーブがかかって綺麗な髪に、傷一つなく整った顔立ちで・・・
目とか美咲に似てるかも・・・・
やべ。最近美咲を意識しすぎだ。
「やっと話せた」
彼女はそういいながら軽く笑って
「燈花先輩は今日は一緒じゃないんですか？」
と問う。
「あ、はい」
「それと、なんで敬語なんですか？先輩なのに。」
「いや。誰だかわからんし・・・」
「あ。すみませんでした。あたしは河末中等部の桜井（さくらい）　風（ふう）て言います。
その、こっちは相川先輩とか燈花先輩の事知ってるんですけど相川先輩は知らないですよね？」
「あ・・・存知てないです」
「知らなくて当然なのでそんな申し訳なさそうな顔しないで下さい。
それと、敬語じゃなくていいんで」
桜井風と名乗る俺が通ってる高校の中等部の彼女は笑いながら言っ

た。
てか何で俺の事知ってるんだ？何故話しかけたんだろう？
「ホントすみません。急に話しかけて。でもいい人って聞いたし、今日もたまたま見かけて・・・1回だけでもいいから話してみたいなって思って・・・」
まぁこういうことは以前にも何度かあった。
これからどうすれば？と考えていると桜井風の友人と思われる女子がニヤけながら5人こっちにきて俺に軽く頭を下げて桜井風を囲む。
「アド聞きなよっ！」
とか
「喫茶店なんかで話せば？」
とか会話を交わしてるのがちらっと聞こえる。
俺はポケットで携帯をそうさして、直ぐ情報交換できるように操作した。
うわっ。俺教える気満々じゃん・・・と心の中でツッコんだが、まぁぶっちゃけ桜井風は可愛いと思うしメールとかならいいんじゃないかなって思った。
しばらくして桜井風と友達一同が俺の方に向き直る。
「あの、アド教えてもらっていいですか？」
「んあー。おk」
俺は用意していた携帯を出して暗くなっていた液晶画面をつける。
・・・・・・・・・・・・
メールアドレスが登録できたのを確認して言う。
「おし。かんりょー」
「ありがとうございます！」
桜井風の友達が話し出す。
「相川先輩～変える方向あっちですよね？」
「せや」
「風もそっちなんで一緒に帰ってあげてくれませんか？うちらは今日は寄り道して帰るんでー」

俺の返事は聞かないで高笑いしながら友達達は去っていった。
「んじゃ帰るべ」
「あ、はい」
２人で並んで歩きだす。
この時間に帰るって事は部活やってないのかな？
それを聞こうと思ってるとそういえば桜井風の事をなんと呼んだらいいのだろう
思った。
「何て呼べばいいんや？」
「ぁ。あたしの事は風と呼んでくれれば」
「分かった。部活やっとんの？」
「親が離婚したから今、父しかいなんですよ。だから父親の仕事を手伝わなきゃ
いけないから部活は入らないで早く帰るんです」
風は少し寂しそうに笑う。
だからさっきの友達達と寄り道に行かなかったのかと納得。
「なるほど。偉いんだな・・・・」
最初はそんな話だったが、俺の学校はエスカレーター式だから
風も来年は俺の居る高校に入るから高校の話や中学校の
時の話で盛り上がって俺の家につく。
風の家は俺の家から更に１０分くらい歩いた所らしい。

１３話：焦り（後書き）

風可愛いな、・ω・、

１４話：展開と気持ちＳＴＯＰ！（前書き）

今回はハルが踏み出したんでちょっと長めかな～？

１４話：展開と気持ちＳＴＯＰ！

風とバイバイして家に帰るといつもの疲労感がどっと押し寄せてくる。
「はぁ」
大きくため息をついて制服のボタンを外しながらベットに転がる。
天井をじっと見ながら風の事を考える。
あの時の感情的に風はかなり俺のタイプである。
外見とか、まだ良く分からないけど性格も。

俺は確実に急かされている。
てか色々考える事によって自分で追い詰めているのかもしれない。
俺の周りは殆どが恋をしている。
玲那と吏緒は付き合いだして、颯真や深川、美咲も。
俺も彼女欲しいなーとか思ったりもしてる。
深川は俺的に無理だとして美咲と付き合えばいいじゃん。と
考えたりする時もあるが、やっぱり美咲とは何かが違う。
まだ性格とか分かんないからかもしれないが風は普通に話しやすい。
一緒にいて楽しいと思った。
でもその風への気持ちは周りが恋愛に侵食されてるから
俺も恋愛しなければと焦って風が選ばれてしまったのかもしれないと
考えすぎたりもした。
だけど・・・・
気持ちは動くと簡単には止められない。
好きかもと思いだすと、完全に意識してしまう。
今まさに、俺はその現象に陥っていた。
まとめてみたが結局何なんだ？
――好き？
あ。風からメールだ！

『さっきはすみませんでした。。
でもメールできて良かったです！』
返信返信っと♪
『んにゃ。全然大丈夫～
吏緒も知ってんの？』
『中学でも相川先輩と燈花先輩モテモテですから
皆知ってますよー
燈花先輩とはもちろん話したことはありません。。』
『やっぱ吏緒は中等部でも人気あるのか～笑
俺は論外だな´・ω・、；
あと、敬語はヤメて～笑』
『タメ語でいいんですか！？
それじゃ、そうします。
相川先輩も凄い人気あるよ！
あたしは相川先輩好きだしー』
ぬ？この好きはあれか？ｌｏｖｅじゃなくてｌｉｋｅ？
カマかけてみるか～・・・・
『そんなことないって～
俺も風は好きだよ　笑』
これを送信するのに少しためらったが送信した。
・・・・・・・
普通１分以内に返信が来るが
５分くらいしても返信が中々返ってこなくて一回
風呂に入って帰ると新着メール１件と表示されていた。
『好きって後輩として？
あたしは本気だよ・・・？』
うへ！？お茶を吹きそうになりながら顔に熱がのぼる。
これって告白として受け取っていいのか！？
でも冗談だったら俺だけ舞い上がってることになる・・・・
てか、待て。この告白（？）になんと答える？

今の俺の気持ちは？
―ＹＥＳ
じゃなくて！ＹＥＳと答えたいよ？答えたいけど
風は俺を知ってるかもしれないけど、俺からすれば1日、いや、さっき会って初めて話して何通かメールやり取りしただけだ・・・・・
しかも相手は一つ年下だよ？
数回コクられたことはあるが年下と付き合った事は全く無い。
・・・・中等部と学校近いし、どうにかなるか。
それにキッカケなんて大した事じゃない。
付き合ってみてお互い理想と違う部分があったら別れる。
みたいになるようになるだろう。
結論【なるようになるだろ】
・・・・・ダメだろ。自分。
そんな無責任じゃ風を傷付ける事に成り兼ねん。
気持ちだけじゃ恋愛は出来ないんだな～・・・
何か起きたら俺が責任をとる。てか何とかしてみせる！
おっし。これでおｋ。
最終結論【風と付き合う。俺が幸せにする】
くさいな。自分で考えて恥ずかしくなった。
ってそんな事はどうでもいいんだよ！
付き合うと決めたら早く返信を～・・・
あれ？メールでいいのか？
まぁ・・・いいか。
心臓が活発になってるのが分かる。
携帯を持つ手が震えてる。
変な汗出てきた・・・・
『それって冗談とかじゃないんだよね？
だったら～・・・
俺が風を幸せにしたい』
この文章で本当にいいのか？

もういい！どうにでもなれ！
送信しました。
電子音と共にいつもの画面に戻る。
「うあーーーやっちまったよ！！」
いつも以上に熱い顔を上に向けて思いっきりイスの背もたれに仰け反るように体の力を抜く。

『やっぱ吏緒は中等部でも人気あるのか～笑
俺は論外だな´・ω・`；
あと、敬語はヤメて～笑』
この相川先輩からのメールにこう返信した。
『タメ語でいいんですか！？
それじゃ、そうします。
相川先輩も凄い人気あるよ！
あたしは相川先輩好きだしー』
「あたしは相川先輩好きだしー」
この文を入れるか入れないか悩んだけど
軽い気持ちで受け取ってくれるよね。
と思って思い切って送信した。
『そんなことないって～
俺も風は好きだよ　笑』
これを見た時相川先輩は冗談だと分かっていても
凄く嬉しかった。
一人でガッツポーズをしたりしたし。
でも何て返信すればいいの？
あっちはその気は無いと分かってるけど自分の理性が
崩れる。
自然に
『好きって後輩として？

あたしは本気だよ・・・・？』
そう打っていた。
何分も悩んで何度もその文章を消しては他の文章を打っての繰り返しをした。
でも最終的にあたしの思考回路は停止してあの文章を送信していた。
このメールを送った後、凄く後悔した。
今日話せたと思ったのにもう夢は終わりなんだ・・・・
何で送ったんだろ。
もう嫌だ。
返信返ってこなかったらどうしよう。
さっきのメールは冗談として受け取って！と祈った。
着信音が鳴った時。返信を見たくなかった。
何でも受け入れる！
『・・・・・
俺が風を幸せにしたい』

え？これは本気？何？
でもこういう冗談を軽々しく言う人じゃないのは知っている。
相川先輩達が中学に居た頃、前の彼女・・・綾瀬美咲先輩って人と付き合っていた頃も特に悪い事はなくて仲よさそうだったのを覚えている。
でも別れた理由はケンカとかではなく綾瀬先輩の転校だったから相川先輩は今は思ってるのか気になっていた。
でも綾瀬先輩と別れてしばらくした時に秋月玲那と言う2つ上の先輩と付き合っているという噂を聞いて
一時期は諦めたが、結局その話は良く2人が友達として一緒に帰っているだけだけど周りが冷やかしていただけだと知った。
他にも相川先輩の事が好きな人は溢れるほどいる。
そもそもあたしが相川先輩を好きになったキッカケは

3年前にあたし達が入学して燈花先輩が人気があってその燈花先輩と仲が良い相川先輩も格好良く、後輩の間ではこの2人が人気を二分しているような勢いだった。
それであたしも相川先輩が好きになった。
そんな軽い始まりだったけど今は完全に惚れ込んでいる。
そんな事を考えたら返信を直ぐに打った
『同じ気持ちだよー
もちろん前から好きだったから』

１４話：展開と気持ちＳＴＯＰ！（後書き）

今後どうゆう方向に持ってこうか悩んでたりしてます；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2583d/

FOREVER LOVE

2010年11月17日14時38分発行